



薰
猶
錄

波

增
775
28



僧
775
28

薰蕕錄卷之參

目錄

軍法不審條

故實百餘

備前國政之聞書

中興鑑言



蕨 籓 祿 卷 拾 壹

軍法不審し修

中村直道藏



一 尚 尉 軍 学 と 中 山 の 多 信 玄 謙 信 之 流 成 介 之 流

中 山 中 山 之 補 流 且 利 流 赤 松 流 乃 灌 流 亦 中 山 亦 亦 亦

中 山 中 山 之 流 成 介 之 流 成 介 之 流 成 介 之 流 成 介 之 流

中 山 中 山 之 流 成 介 之 流 成 介 之 流 成 介 之 流 成 介 之 流

中 山 中 山 之 流 成 介 之 流 成 介 之 流 成 介 之 流 成 介 之 流

中 山 中 山 之 流 成 介 之 流 成 介 之 流 成 介 之 流 成 介 之 流

中 山 中 山 之 流 成 介 之 流 成 介 之 流 成 介 之 流 成 介 之 流

中 山 中 山 之 流 成 介 之 流 成 介 之 流 成 介 之 流 成 介 之 流

中 山 中 山 之 流 成 介 之 流 成 介 之 流 成 介 之 流 成 介 之 流

上 山 中 山 之 流 成 介 之 流 成 介 之 流 成 介 之 流 成 介 之 流

中 山 中 山 之 流 成 介 之 流 成 介 之 流 成 介 之 流 成 介 之 流

一カニ

合戦に任ずれば流矢と承るも先決炮と打らす射を後
且抑と云ふ士徳は及一回世に流矢と承るも後合
る遠近の任は皆勝負の事と承るも此の流矢の
しるべきは其の勝負の切細と遠中より承る事

一カニ

徳三は成入陣と云ふ或は或は角或は角或は角或は角或は角
若くは此の勝負といふ形を承るも此の流矢の形は
何れ用成るに依りて承るも此の流矢の形は
三つあるに依りて承るも此の流矢の形は
此の流矢の形は此の流矢の形は此の流矢の形は
皆一文字の流矢といふ形を承るも此の流矢の形は
此の流矢の形は此の流矢の形は此の流矢の形は
此の流矢の形は此の流矢の形は此の流矢の形は

一カニ

士平と下知するに挽と云ふ流矢は流矢一回に依りて承るも
切極むれば流矢といふ形を承るも此の流矢の形は
此の流矢の形は此の流矢の形は此の流矢の形は
此の流矢の形は此の流矢の形は此の流矢の形は
此の流矢の形は此の流矢の形は此の流矢の形は

一カニ

人教は然るに其の教令を用ひて其の直宿員は其の
此の流矢の形は此の流矢の形は此の流矢の形は
此の流矢の形は此の流矢の形は此の流矢の形は
此の流矢の形は此の流矢の形は此の流矢の形は
此の流矢の形は此の流矢の形は此の流矢の形は

一カニ

此軍より其の兵糧と云ふは此の流矢の形は此の流矢の形は

極よおんくは法施の的の石化或は堂前等又は大筒に抱
打ぬて皆一人の石化とて一石を戦場とて大筒に働くと用事
る者とおんくは為れんが家中あつたし抱古のくさ
下敷

中七代三々 以和 全十條有たる也

一 通年一うらうし二軍法者く即能人多くおんくは軍法あるは
俗傷く教おんく人と抱ぬの迷ふい後事とて古軍とて去とて
字々く軍とて多しとて見うとておんくは只一編の是とておんくは刑
の是とておんくは勿傷を極く後つたこととて及んぬ
とて是おんくはとておんくはとておんくはとておんくは

十箇條書法

一 初條 不審かるとしての仁の款大筒のくといは方も
くといはくしておんくは又とて大筒に成は方く流儀とておんくは石
のよなたておんくは方極軍術とて漢くくおんくは管扱のくといはく
余波とておんくは南無く軍術く廻轉くおんくは取らぬとて
取らぬとておんくは二云く成とていは大筒と加えとて教おんくは抱た
二云く時代とておんくはといはく軍者とておんくはとて
やくに加えとておんくは不審内く仁とて抱ておんくは
而已とて取らぬとて後より坊神伊取二云くおんくは法といは
中二云の軍法とておんくは後とて二云く月事とておんくは
とて下く抱神とておんくは及んぬとておんくは事付とておんくは
おんくはおんくは成事とて軍者くおんくは侍り世とて賣物と

業としてたゞしく理屈をわきまにせしむるなり故をたゞし
たゞしく務めしむるに侍の恥を知らず後々務めしむるに侍
の恥もたゞしく侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
くとして後々侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
活めしむるに侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
と受くる事難むるに侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
生民里奥別攻し侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
より鉄炮をたゞし侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
九戸と切まらり侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
武勇を侍て棚と二重と侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
勇方に侍む勇兵を侍て侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
介つて侍相終る滅亡を侍む侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
おこしむるに侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
常として侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
又介介から侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
鉄炮打ち進めしむるに侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
法を侍るに侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
より侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
先是侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
より侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
ふと侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
前と侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
介つて侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
侍の代として侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし

あつて侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
常として侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
又介介から侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
鉄炮打ち進めしむるに侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
法を侍るに侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
より侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
先是侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
より侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
ふと侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
前と侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
介つて侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし
侍の代として侍の恥を知らず後々務めしむるに侍業をたゞし

物人もは働き方待利多く一番流と云ふとも柄の
すれはるるまゝ立てあつて他法の柄ぬりなれば今時
軍の上もと能くわつて一物成流と秘術二つもあつぬ事
よそひ支ぬたき物所たの半と承流と流と秘術なり
上も名人といはれ一人もせしむる戦ふの時も武士の
うでもすぬも士民百姓のこころ故土流む事よ今時
表是皮と云ふ他法の流とけりぬの文のゆゑ士の川流流
の秘術と秘術なりよと合戦の時も流よりあつ入ふ事
よとあ代に柄と考つる軍流と用する中柄に健なり
男、三間柄と云柄と柄と云も三百も先と探てたきと
うて能くせんゆゑも甲州流と云柄に用ふ事よと云け
杖よ流と流軍中と流法よぬとて中流もあつては
流と云柄と云合用の流柄と云用する中流もあつて
男も成程と柄と使らぬた長柄と云柄と云と云へは
ゆゑも時り取も杖と云とて刃の業と云刃と云人切り
と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云
甲州よと云と云と云と云と云と云と云と云と云と
も持るる流流と流よと云と云と云と云と云と云と云
持現様と云流と云と云と云と云と云と云と云と云
と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云
眼と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と
出語り若ぬと云と云と云と云と云と云と云と云と
同あつ者ら平生の務物と云と云と云と云と云と云と
ゆゑと云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と

流と云柄と云合用の流柄と云用する中流もあつて
男も成程と柄と使らぬた長柄と云柄と云と云へは
ゆゑも時り取も杖と云とて刃の業と云刃と云人切り
と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云
甲州よと云と云と云と云と云と云と云と云と云と
も持るる流流と流よと云と云と云と云と云と云と云
持現様と云流と云と云と云と云と云と云と云と云
と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云
眼と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と
出語り若ぬと云と云と云と云と云と云と云と云と
同あつ者ら平生の務物と云と云と云と云と云と云と
ゆゑと云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と

又吳國の軍と云ふは八陣六法搦奇陣等々陳圖
と云て易く及理あるも要事なり云云たこれに
皆宜理なる業と云ふは抄の事なり使われし
の如く地を布て陣杯と云ふ地形に依て方角直
と云ふ一定にしてる所を築城之の因地形の上も何ん
後子ありと云ふ一極を中事なり此れを備えし古理折利
と云ふ介と云ふ事あり

一方に多し不常もねんぬ然し折撲投軍者とも
流越後流たし旗子と合するものなり是の二云く本法
と云後方加の拍を西の旗の子と合するの事
此軍法を合時ゆ飾の仕形の方より飾りし事なり

○か村日也成事と云々軍者れ吳と云ふ法と云ふ
卷の先かあると云ふ所云と云く軍法に外を在來の足
さる所の取給方なり杯法に依りて云く本法に依るが
程拍子合符の二云く時代は程拍のゆゑ進退を依ら
しと云ふ家の記法明の西の旗の軍法と云く其の
二云く軍もゆゑに法に元なるゆゑに西の旗の事
日々に軍のちり士卒に如常と云ふ軍と云く其の
ゆゑに軍の如く罷て云く吳國の軍は士卒に如常と不
用する軍は拍子合符の如く大拍の掌握ありし故軍
と云ふ記法も二云く時代は程拍のゆゑ進退を依ら
しと云ふ家の記法明の西の旗の軍法と云く其の
二云く軍もゆゑに法に元なるゆゑに西の旗の事

百もの口指指を先ず一と云振運送くまて侍りて
はてふの交りけり成と何れは流流しとて守他は働
をちり成りらむらむ

一 廿七條ノ不審ノ心付事ノ如くは今ノ世ノ有様
と斗は取ら大形をせんこれあきれる斗とありし
は一半坊の守り軍法も寸法も秘傳も秘術も皆何
し用ども立ふ事と抄事と都りと先ハ元統氏康信
玄謙信二云信長云秀吉云とて何れ軍略も抄術
斗と軍法は守りも攻めも沈指の白く大指の寸
尺三軍と進退之士卒と智勇とかりふ軍法と
大云と孫呉諸葛孔明李靖戚南塘杯抄云此云抄
斗は日本ノ名は軍術と抄畧斗と軍法ゆき他あり

其く智勇と偽りて偽利と偽ハは形を覚く者切く者とい
言派とて相まぬ一踏すく言派とて人脈とありし
今作軍はは形士卒の向く抄事ハは形ハ士抄術は守と
さす世後を見り抄術は守りといふは守りといふは
は形ハ士活せられ守りといふは守りといふは守り
と者く子孫に在り者も何れ守り目もなき兵の人
何れ守り目もなき兵の人ハは形ハ士抄術は守と
軍法と名付て家来と名付て守りといふは守りといふは
てい守り目もなき兵の人ハは形ハ士抄術は守と
と云名付て軍と名付て守りといふは守りといふは
は形ハ士抄術は守と名付て守りといふは守りといふは
守りといふは守りといふは守りといふは守りといふは
守りといふは守りといふは守りといふは守りといふは

以て一軍者兵と書かれしとて、
の形中より各物なる古物流儀秘術と云ふに
事なりし軍法と書かれしとて、
流儀一箇一物と云ふに、
不中事如止と云ふに、
久け実理と云ふに、
アカカシキ物

一才八條く不為身克高代は、
ともし術と云ふに、
もとて云ふに、
も牧ら上方いさかく、
も不練練と云ふに、
まじりとも、
依り信玄謙信二云く、
書とぬ集たる物と云ふに、
より切りのと云ふに、
る代になりて、
うにいしと云ふに、
るる術と云ふに、
事、
見るに、
略く一藝と云ふに、

も不練練と云ふに、
まじりとも、
依り信玄謙信二云く、
書とぬ集たる物と云ふに、
より切りのと云ふに、
る代になりて、
うにいしと云ふに、
るる術と云ふに、
事、
見るに、
略く一藝と云ふに、

まをるふ派練らるるなりと櫻名を致沙河河内赤台牧士
寄るね成るり元方寄りに傳もあさり取言ひりたき
やうやうい依も大坪八條おくる物と習ひまよとを
るよと今我難成る取軍成らる跡場士とも寄物り立
よせはるり成ま先と世果より流り今の世より成らる軍
寄るねいりて物と格式と極み成りてお見こい相治世
よ成らるり士寄あさりよ流り取園赤と武士も大坪八條と
寄り半に成りり山南代よりとりて大坪八條も軍寄と
付添ひ成り別軍寄と教しり中族もあさりい中理とお存
末らのおりり元方寄るり取存いおけい取軍い取用
かま利寄りり及理にお抄りり取存い取金成らるるり
一寄九條も不寄軍者成りり取存い取大らりり寄りり

る方い

一寄十條も不寄取らるる取らるも鉄抱も寄も穢所牧士のこと
くら軍中の用半お流りり外におりるる取らる大筒と
軍法い平生と業いり寄練らるり及りり取らるる取
せと軍法不寄と取らるり十と条止りり取らるり取
と付りり取実の心然も取らるり取らるり取らるる取
上の料寄りり半お流りり取中合長寄りり取らるり取
抄り半と極み寄りり取らるり取らるり取らるり取
取らるり取らるり取らるり取らるり取らるり取らるり
取らるり取らるり取らるり取らるり取らるり取らるり
取らるり取らるり取らるり取らるり取らるり取らるり
取らるり取らるり取らるり取らるり取らるり取らるり
取らるり取らるり取らるり取らるり取らるり取らるり

治るるくぬゆい今の子事軍令の代の平け、平け
とて平生くよの者、西社をこころす、戸と書く、細信
口交汁と習信、ぬゆい、今の子の代、料多くと書、事と
考らぬ、大少くとも多ふ、時代のせん、くす、くす、ふ、
抄、ゆ、て、介の者、事と、五、原、中、山、也、と、今、時、の、軍、者、
く、事、の、上、の、料、多、と、中、半、よ、若、加、友、清、正、名、若、左、の、城、者、
清、正、作、け、何、十、五、の、隅、を、領、城、と、一、人、つ、十、二、人、の、せ、月、
令、の、ふ、い、ふ、と、物、令、昂、と、書、洗、髪、あ、い、社、之、の、月、
者、と、本、や、り、の、音、改、と、り、取、ぬ、と、十、二、大、石、ち、う、と、死、
こ、く、い、ぬ、あ、い、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
令、と、ふ、ま、り、と、夫、の、日、用、債、と、決、山、よ、ぬ、り、と、死、
ゆ、ぬ、事、実、と、考、へ、と、書、の、代、の、書、信、日、用、と、信、ひ、
あ、ら、せ、り、ゆ、い、清、正、と、書、信、皆、足、控、中、く、す、く、は、信、小、者、と
ぬ、ぬ、又、い、百、姓、主、お、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
此、六、七、十、年、以、前、と、も、云、義、と、書、信、日、用、信、半、と、い、ゆ、族、
お、ぬ、信、士、が、若、事、中、間、と、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、半、と、ぬ、ぬ、武、者、
家、来、ぬ、信、信、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、後、の、月、分、と、家、来、と、ぬ、ぬ、
若、と、信、出、し、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、信、願、と、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、信、出、し、
主、宰、願、た、が、入、信、願、と、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
ゆ、ぬ、令、ら、云、義、裁、り、日、用、と、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
令、と、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
ゆ、ぬ、信、利、が、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
書、信、と、い、と、書、信、所、人、と、信、信、信、信、者、所、計、起、り、
書、信、の、物、入、莫、者、今、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、

あ、ら、せ、り、ゆ、い、清、正、と、書、信、皆、足、控、中、く、す、く、は、信、小、者、と
ぬ、ぬ、又、い、百、姓、主、お、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
此、六、七、十、年、以、前、と、も、云、義、と、書、信、日、用、信、半、と、い、ゆ、族、
お、ぬ、信、士、が、若、事、中、間、と、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、半、と、ぬ、ぬ、武、者、
家、来、ぬ、信、信、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、後、の、月、分、と、家、来、と、ぬ、ぬ、
若、と、信、出、し、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、信、願、と、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、信、出、し、
主、宰、願、た、が、入、信、願、と、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
ゆ、ぬ、令、ら、云、義、裁、り、日、用、と、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
令、と、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
ゆ、ぬ、信、利、が、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
書、信、と、い、と、書、信、所、人、と、信、信、信、信、者、所、計、起、り、
書、信、の、物、入、莫、者、今、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、

十文字は掛あめのもしこしこ一固め宛中も一紙切つつけさし
切し切つてされりの子にわたり人柱を月三アト山とるる
千五百石と儀にふり斗よこけ控く長き町く小路に押切敷
竹の角に青大ねとふさくねと伝えく合書も突ふあり
よるも御まのちる成ありふりさく火と人ね伝えく人ね
池長刀と持せらるる常備の者なりくは波のたたき
ふ砂地と一赤、清もそりとも構ふ山と牛く澤よる也
りひさしうらなる物進とるよのせ出くぬと打見ひり
とよるぬたは来くぬたぬとる火と清く波を一赤
まふり山と大柄と細長き町く小路のほどに伝えをく
やれありく御まのちと共踏りく前後へけけりさく
ふり山とねとてさくくもに斗もすく物進く家も

誠く軍者く中ねくぬ教十年來徳家たはるぬ
ぬりゆひ是とひて軍くさ物おまき長いなるやうなり
山形は治世く礼と志れとともはる中事ともさし今
太平く治世くさくもらるる家くはれぬす人へ誠く心然
あつて度ぬ山形はたつて風俗もさく自然なる
物とも山形は物事しゆに勝りくもらるるのねとさし
はた是よ後と山形く一筋く仁義もさくねと不為く
降く書けりゆくと

石巻生惣書述

享保甲辰十一月

文政六年^{壬午}十一月二十九日寫之 中村直道

董猶源をく拾式

中村直道

故實百介條

凡故實と云ハ天理の故文人事の儀則を自修身
以至於為天下不可一日而無禮天叙天秩人所
共由禮之本也よつり内々敬つて終つて如う
りも義理とらうりの事と名を記しむ道情よ
まうし心平と情は律儀好道と敬礼と名はく人
をいふとらうは念法として扱ふまゆらまひ云系
紙とらうす肝要の家業うとかうとらと恭敬
と云へ細りと名をいふは細いと云ふ細
とありと云系おとくをどうとら形と云ふと外磨懇

と仰り内々欺りて人と慢者先と慢礼と云ふ
古人のさうく知りて心前也云々の改實も成りて
さうよあつて措くものありて長くは初て常は
初ふべき心志ありて人の非も主宗と命次も各日
改てん内介の後と定むべしはま物の清浄波と
礼法好実と知りて一内波法の定むけり終り
よの智ふ人の可弁事也と云ふ

實

- 一 仰る教と信ふる心包事
- 一 禱と名してまの誓事
- 一 高流相違と心地とるる難事
- 一 後方子らるる條とるる同事
- 一 不之心識と性素人と事
- 一 信定くありて抄物おわするる心用事
- 一 誓事と成常とるる受用事

目録

- 一 士より者へのつき大意云々
- 一 三元三要の目付と云々
- 一 中とし并へられを礼止がら云々
- 一 毛敬を弁へられを本名と云々
- 一 性情と受けられを礼と成半
- 一 之欺の二つと不弁の初と倦る
- 一 根名礼実とのふ半
- 一 禮は好悪と情と傲氣と納半
- 一 礼は己より儀と云々
- 一 二つのひびくと云々
- 一 貞節の位と云々

- 一 修飾の内氣と並和と半
- 一 すくくをとくくと云々
- 一 挨拶とのふ半
- 一 時と中とりのふ半
- 一 禮と柄とむと云々
- 一 礼は節と云々
- 一 忠とより云々と云々
- 一 辟礼と云々
- 一 力と傍と二つのふ半
- 一 贈と對と二つの礼と半
- 一 礼と柄とむと云々と半
- 一 門戸が入むと云々と半

- 一 言長々家々つゝん持々奉
- 一 我病中貴人出々付々々礼奉
- 一 人の病中と聞々々つ々礼奉
- 一 育々あふ々三々々んを々奉
- 一 玉政と評々風説とつ々奉
- 一 先祀の忌日つ々々を々奉
- 一 大人の忌日あつ々奉
- 一 神前と情々々々々々
- 一 鬱々々々々々々々
- 一 送り送々上中下々奉
- 一 有敬々片敬の奉
- 一 位々々上紙大判大文字々奉
- 一 ちれてあかちり親々々々奉
- 一 傍面々々々々々々奉
- 一 不敬々々下僕を罪す々奉
- 一 貴人の出々々々々々奉
- 一 貴人の出々々々々々奉
- 一 貴人々々々々々々々奉
- 一 貴人の出々々々々々奉
- 一 貴人の出々々々々々奉
- 一 貴人の出々々々々々奉
- 一 貴人と不見合物毎々々々奉
- 一 相成々物々々々々々奉

- 一 言長々家々つゝん持々奉
- 一 我病中貴人出々付々々礼奉
- 一 人の病中と聞々々つ々礼奉
- 一 育々あふ々三々々んを々奉
- 一 玉政と評々風説とつ々奉
- 一 先祀の忌日つ々々を々奉
- 一 大人の忌日あつ々奉
- 一 神前と情々々々々々
- 一 鬱々々々々々々々
- 一 送り送々上中下々奉
- 一 有敬々片敬の奉
- 一 位々々上紙大判大文字々奉

一 拜願し物出半は用半
一 人の書字すり前ふなく通半
一 人の疾合し前ふなく通半
一 人の及む法を急めめさる半
一 人の虫物そまゆはるる半
一 人の上たふふなくすりる半
一 人の盤上は物さる半
一 人の盤上は物さる半
一 人の盤上は物さる半
一 人の盤上は物さる半
一 人の盤上は物さる半
一 人の盤上は物さる半
一 人の盤上は物さる半
一 人の盤上は物さる半
一 人の盤上は物さる半

一 人のきふ道具例よりきふ半
一 人のゆきききあいて同半
一 人の約束して着たがふ半
一 人の前よりつもいく半
一 人を見探はる半と不知半
一 人の年齢頻りよ同る半
一 人の氣さるさるく通半
一 人の自満し物感と不付半
一 人の書物そあつてけきん半
一 人の愛半か物徳の半
一 人のまゝに於て頻りよ戸とま半
一 人のまゝに於て大笑長らくびの半

- 一人は酒飲類を忘る事
- 一人の前をばけり食化食事
- 一人の意半類を問事
- 一人の見ん竹のぞみる事
- 一人は向て心をく思はく事
- 一人の物より不意意をくら事
- 一人前より手拭揚枝不持事
- 一人前よりあやしきと浴ん事
- 一人前より化と切ひげとぬく事
- 一人の道具を遠慮を事
- 一人の親戚とあはれ櫻も物事
- 一人はまののれん植好く事
- 一人は振廻のたしんんりなく物食事
- 一人は寺社としんりさ物持事
- 一人はやりてんあやうど荒ッぬく事
- 一人は礼身佛具類巻をまの事
- 一人はあさきしやり海りせふ事
- 一人は手洗がま今とらんかむ事
- 一人は庭前より心をく事
- 一人は麻の前心をく事
- 一人はまきしんをく事
- 一人は徳をく時忘こと事
- 一人は酒宴の芝居意中前事
- 一人は見物の場一人より事

- 一 うれの迎ふふあさ事
- 一 葬礼と送るふあさ事
- 一 馬中よりひげとそら事
- 一 ふもろく女北時と食事
- 一 うれの同敷敷以下ふあさ事

以上

右百ヶ條を故實く茶歸して又奥成肝心也
志く輩先い名を合更用歴く可有修訂若也

慶長六年 武田収松系

正月日 清芸判

莖菰録卷之十武終
文政六年二月十日写之 中村直道

莖菰録卷之拾考
備前國政之開書

中村直道輯

一 少將殿慶安三年の比より儒学。御志を未嘗寛文七年迄
拾年の同朝書國政の心とあされ小人安穩く成るな心
合ふ所を先年より学校と云邪教と稱之友之をた
日かゝりて学校は主たりを古例を正し成る禁裏に
春秋の釋奠をて先聖の祭と大御統の成る其大学
寮勅學院をて者く大学以下の官職は其未だ法園
にも学校制をて者て神代神代に信た盛るはこれ
ども彼既天子邪たりて逆臣殺殺し馬子。同家。又の
天皇崩御の後叔父元徳の皇子と教しはる王子をてか
ひ礼と記し。神代相續の忠臣たり。守屋の大匠と

佛法きくふ故に道徳なりともいひくも是と教に別し存故
又し其の言者なりき宗廟天子ともいひくも教にまじり本朝
は例なきを以て帝後なりとも推古天皇や号し天下の
政といふ既戸馬子二人して教なき事をせりたはらひ
教なきを堂舎佛閣とて造り信尼とてつひあるを以て魏の
若くとも信をたもつれともといひ多くの順地とて今日迄と
いふこと一物又佛法信せざる事といひてち屋造り刑とて
佛法信作の考へていひて是と教に別し存故に神に信なき
いひて若くも神に信なきも神に信なきも神に信なきも
又利欲の爲めなり貴も賤も賢も愚も成も抑もて皆佛に
の佛法の爲めなり是より日本の風俗なりて世人の念も
信信所の形なれば王公大人も是とていひ信せしは是と

佛氏の中にもいひてはるる其なり 布衣を教に教す所なり
皇子とて信共由來ともいひて信

皇使を平ししものもなり ありてより 佛王云大人をくは氏
とて寺の依りて成天子の御連枝とて是と大祀

天照大神の御通しなり 釋門は御入かたり 神の教とていひ
少將殿とて是と教とていひくも 時宗ははらりて 貞年 河上
儒の流りははらり 河上 河上 河上 河上 河上
河上 河上 河上 河上 河上 河上
河上 河上 河上 河上 河上 河上
河上 河上 河上 河上 河上 河上

一 長山の城内を九のをいふ元年 松平公 八 教 はら 教 はら 教 はら
校 はら 校 はら 校 はら 校 はら 校 はら
校 はら 校 はら 校 はら 校 はら 校 はら
校 はら 校 はら 校 はら 校 はら 校 はら
校 はら 校 はら 校 はら 校 はら 校 はら
校 はら 校 はら 校 はら 校 はら 校 はら

一 郡下郡民の事人主群中、昔々庶民は下知はんと一郡
大概を人主所作とせん村とて下知と筆の書と海一た
以教りし大郡の学所二人も指りし百姓をも陸の町から毎秋考
合学同淑論任の町人百姓をも子孫学同りし文育あり
老い彼名書の抄と讀りし志をも大和小学以一な、京都と
千歌潤下りかん

一 國主の命とて山中の百姓町人等々古史讀りて命の事
是の存穢と勅中たる際々むらあ命りし小学に書寫の讀
まらるるは此の淑論とは告とすら然と戒りしを讀の由
存の賜らるる或は意主と歌りしむの志とて國主と下り
必し慶賀と成り然も侍り志とて天見とて改りし亦天見志と
り者町下指りし町人の家穢と勅やうん法の改り教(貧困

とて家穢と勅然も志とて中子の浪子と侍ら家穢と改り名ん
振へん

一 家中侍武士の傳極急なれん小力と士彼初の前りも池と持を
りし若菜まじりぬれりの少男も亦徳大池物と述りかん

一 伊本長門近年の学問志し、其先地改りし長門家元
伊本小集人、その者学志厚者として長門と物ケりし國人も長門
方よりむ下知も、其理者ち教りし位版任り

一 目安箱町、其地なる國主、其地流ん在所を以て代
寫りしと好曲とけりし民とせりげり年、亦能成り

一 大男の士も亦其地相しは府衣袴の十も紙衣本綿と老りし
若新紙衣やなあくもの、日野純紙衣とて其作り

一 池田出羽屋の百姓も亦其地なる年貞承の儀の内、其

うらふ今なき難儀と祈り十萬の死に似せし病に苦しめ
寺の門内へ入りて不動降魔の利益を祈りて寺僧
志く石切のおまじりし護摩となき肝腹とてさしこめ
何の跡もなせしと明日の空に十萬の寺へあつた寺僧
力と居し不動と根みおひふ不動の靈徳もなせしと
祈りて難儀おまじりし石切の物に不動と抱持し
十萬の寺へ入りて祈りし寺僧を以ておまじりし
寺の僧に不動の縁力なき本此らに法法
まてく邊俗に任じり即時酒肉と祈りし十萬の被不動と
祈りし祈りしと任じり乞ひ乞ひとて六萬の還俗の故
流世の助けは任じりし寺僧祈りし十萬の還俗の故
祈りし祈りしと任じり乞ひ乞ひとて六萬の還俗の故

作越六十年間の観音堂の後の堂に祈りしとて書付家
老より祈りし安定祈りしを以て祈りし観音堂の
祈りしと一字と一字と祈りし観音堂後の堂に祈りし
観音堂日本とて三十所の巡礼観音の内と地上下の若
とも言伝はれし祈りし観音堂の祈りし法人は述す
南無地蔵の祈りしとて観音の像と打りしとて祈りし
祈りしとて法人も祈りしとて像と祈りしとて祈りし
人の志敬する仏を祈りしとて祈りしとて祈りしと
祈りしとて祈りしとて祈りしとて祈りしとて祈りし
仏と祈りしとて祈りしとて祈りしとて祈りしとて祈りし
祈りしとて祈りしとて祈りしとて祈りしとて祈りし
災も祈りしとて祈りしとて祈りしとて祈りしとて祈りし

一 一丈不耕の圃共胤と信は一婦不減の圃共宮の信とす此丘
比丘尼の多しといふ氏きく人せしむるあるれば此と信は還信
たる者のいさざといひ信はつとふとす

一 一家の中或は老人或は病者或は女又文盲ある者の死分は後
の事し想ふ坊主たるもの信法とていふ建言不成といふ墓
宗しんゆて春の立たす事ゆり 忍寂の信法を逃りて息よ
佛法とていふ神道へ入る事なりまこと知れりて若忍寂見
たりれば信法とて信法も教者とゆりといはれいふある者も
之理よ逃るの事いふ信法用と事なり 君子の不言して徳を
以て人伝導とす言信と用事いふ未だ事

一 神道の心とて先づ儒道に誠とておのれ誠なり時を明く
ゆるり時を正しなり 教氏たる人者の心とて誠をまて迷とて

正直は先ずなりなれんといふは倫佛のありれ
多りともすといふ節の有者心もあつて其の儒者のま
あひとていふ是又名たるいふは信者成とす事

一 在家佛者、ゆりて老とていふす不測の神道よ背く
根よ祈禱成る人の賦と成りていふ事

一 山中の山林意し材木薪石といふは而もなり町人百姓み
たりよ結構成地事とていふ堂寺と新おま事とていふ
破換といふ依りて修理成加或はたみといふちいさく事とて
一 神儒のよとていふもの各別とていふ者老と根よ寺と推べり
りて今この寺とかいふ坊主春をいふといふ事あり
まは墓所推言とも今とていふもの老のをいふとていふ
たもいふ事あり

一神儒は言ふ者誠と先して其は後よまて一喪祭と感徳を
以てたすてふ心より不送者ハ仁者の法と用て可し人死く
魂氣ハ中より天より魄体ハ去り帰る理の常と迷ふ
朽るんままきぬり然た孝子の情ハ親の神と敬よまて其
不忠を以て志すて掩もの一祭を神道の下分取まて
ものハ歷斗旋恒はそんを難及者ハうの矣然たつら此と
菓子のもまそふ可し祭の形ハ敬よまて朝夕日こも
のこして念と入るなり或ハ親生て居られたるハ敬よまて
ふるまふを以て可し祭の別儀はなげくの
悲とむこく祭ハいまもまての敬とむまて天地の
道も易簡也こむつらくハ天道ありまて人の心とあつ
まもも所と位と知るべきもの

寛文六年八月廿二日

水戸沙願内侍書

一惣して諸家たまて可し所よて小寺多し且方分教
ても大地裏微よりまのここれよて由及有る寺と淑世
かりまて其の細りまて学僧の居居せぬ況ま外の小寺たハ
下の愚僧のこして法外のいとなみと傳り僧た俗た志れどして
民とまて其の國の費とまて一風俗の禱と成り有る意の小寺た
今夜穿鑿とまてげらまて被却治 作付まて考
一佛法相續ハ郷村の人民の滅罪のたられまて其の智とまて
ま切らまて有る被却とまて塗地とまて寺とまて其の智とまて
且ねたも相續の寺とまて其の智とまて 作付者

一 右に破却し小寺たり坊より中病衰或いは行方の老神に所
所の在座但し意なきを穿鑿虚実派に仍るふおの
取も仍の五(河)も仍不しく下知たてともより一の寺と
詔を以て致すべし ともよりて取も仍代官よりか、杖指
の取もてまじ事

右に通破却は 作付小寺た寺井家財に依りて坊に下旨
初派はつづきとも心算たあれた又通俗のく、なな老の
波世の取もより居不は作付ては下り事

寛文六年八月日

浪野因幡守教沙書

一 我頃分し傍に佛法に大抵とも改めくぞして凡人波世の道

と徒知えよりより一日座を存考教訓をともとも悉く
知えせしめたる由よは校をわいむし釋迦の太子を以て
欲に我の法と見え玉とて道心して者よ静なりを好み
終よ何く始もかく死すぬ我成地の仏若くは来りてさ民俗の
持して俄に道に入發を判傷取を悉く計を主平はれ
わいの言我を念位と脱ん事まで分明くと終ぬいむ
道人乞も大成なり 月今以後佛の教の如くをびもせめて
民百姓のぞく力を抑くおんりの根本後をさるならんつ
つやまことし又寺を新おまるとの禁制より破換せの沙理
を加えし とも力の衣裳木綿の外に不用たるべし 奥島の
肉紋好み女性と抱き合は勿御し初歩計もさき老者病者ハ
門介不出たるべし 酒のむり仏もきくはば程に禁制を

は不委細成りて武目よき是等の報を勤くくちし傷を
我取らよ一宿も不並目付く後人介、石河原の公者を
河人伊の事いさ品より金銀を者之

寛文六年八月

定

一ヶ寺の傷を人小傷一人男式人六人

備前國政録大尾

松園本寺本本

文政六年三月十九日至同廿日写之

中村直道

薰菫孫卷拾三

薰菫孫卷拾四

軍陳之圖書

中村直道輯

一 信長之流り此城と攻め前、藤本斗とて初^お見よ城近也
おりて主候川也一、此のさ終二里に服、沙孫とて了れ款よ
池乃とてを相款のた、村分に城とをを初め、終出家、
是せのさとてけてたきと打えらるるをふ
一 川中合戦、時鏡伝方無糧き、ころころ、信玄出ず、
初とてけ服、人殺とまらま、たつとも右回あ、心持あり
一 信玄さま、合戦、時先子の人殺と款、ころころ、流先より
りり、ころころ、合戦、時、初、ころころ、是き、いの御あり
一 是、時、内、合、戦、時、初、ころころ、は、用、馬、れ、つ、ころころ、弱、
と、中、ころころ、は、け、た、も、三、候、ころころ、は、ころころ、は、あ、怒、知、

一日向坂道に付法衣の如きもの内考は程の如くト以て法衣と
法と稱するもの評判と云いし法を曰く申はして法衣と申
並日向坂道に付城東の付城際柵に母衣よりま
ゆらりと云々申向ひして是付相法法衣と申
中に又母衣と云々と云く所より申て之を
申ゆらと云く所あり

一 横田守兵衛の友佐と云く人として云々申す事

一 長野の志法施のさうらんと云く申す事
川と云く事

一 近坂の貞友の志法施と云く申す事

一 志法施と云く申す事
山内願心と云く申す事

山内と云く申す事
人敷と云く申す事
大軍出長進と云く申す事
人敷と云く申す事

一 時をいさし時詠は山のて物法衣に
法とのまを云く申す事

一 川原に法衣と云く申す事
申す事

一 款川と云く申す事
此ぬれらと云く申す事

一 款川場と云く申す事
人敷と云く申す事
志法施の河法衣
申す事

一 城下より水きれあきせぬ所より城下より又水白濁りて馬を
けりしれいあきよりあきのくく水もくくえんすりし
おのひ門より事

一 城より急ぎこれに決地多あり死人多ありとまらつた
ら付去井にりてころころ事

一 首首と水かけしあきもろく帯と三重又先首と水ぬ
半ぬり捨使とこひ首と水ぬり首首と水ぬり事

一 尾初劫も水ぬりて夫死にけりけり時々決地多あり負
死人多ありあきぬ所は又死人ころろ死にえんたも稠り決地
ゆりぬり退とす付ていふ道も退きに決地と打ちころりせ
お菓とこひころりゆりころり退事

一 大坂とあつちりぬりぬりぬり大坂とあつちりぬりぬり
お島の大なり城下にしていふお島すり初なり

一 孫子人よりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
し事

一 信濃衆甲斐も信玄に在城の御言よの信玄はすし信城のま
りりに城とあり信城のこいめされぬも信濃の方信玄に
と信城の梅の由りぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
事いぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
に分二たとせ若信玄ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
信玄ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
今なき信玄の願いぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
とのきんちぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
信玄ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり

んちやうと云うなら利まふ人殺と押籠十八里のほど彼中
の信濃方何れおのひくけもあるさう(おれおのひくけを
町りやうと云をうらうらや)何れおのひくけと云く進くづ
たうらうい御義理一谷てはるるをとおろされる御
回おたり(是氣年と云付)

一 時余全戦し時いられむし竹やよに腰おけと切まと前
けを推するぬ(時一肥ち所にて進むれり事)

一 款の親人殺御まきまきなり退人殺教林はん方と推回
ん有御いあしと云らる可きとそ一勝と物全
ま候まぬ神とことと云らる人殺也す候
候るる所を推すと約束して教林と云らる人の
しと候らるる(事一進人殺とまき候はらるる利)

一 横田次表と云る表の内一様かまきと云らる事

一 内取御理城攻時往後治と云はれり款と云わぬ(此は
しと信玄と云信玄と云我後治と云しと云はれり山形
人殺と云今一はかり回に城まらぬを時款の大將かぶ
しと云候菊田と云せまきと云人殺と云ら付又一山
方能付らにせりし時款菊田に付らる人殺と云
うんと云ひま候今一しと云をり殺と今一山菊田はと云
成あつと云をりしと云何のものもや城へ進門の在
よ人殺と云らる安れらる城を御ん事も成又山形
事も成時信玄人殺と云の中はま相山方人殺と云
山形と云城よりけり事成を尾能付らる事付移る
しと云合と云はれ治と云はれ付の時をり)

一 信玄を誘捕し城を占めんとす中よてなげらるる事
すももの物ゆる城としかとも留りすねんころあつたはし
あつたをふらふみに攻らましこれし城ゆる事あまゆ
城とぬゆりし事

一 信玄の軍場を占めんとす中よてあつたの軍を誘ふ事
少し大勝とせすまけぬ物としぬ物とばかりにて大勝と
する事とせすまけられぬ事とありし後いふ事と死する事
猶ほぬ物としぬ物といふ事とありし後いふ事と死する事
一 信玄を誘捕しすこと大勝とす事ありし事と死する事
一 代の軍の任事し少し事ありし事

一 信玄を誘捕しすこと大勝とす事ありし事と死する事
あつた中よて大勝とす事ありし事と死する事

あつた中よて大勝とす事ありし事と死する事

一 信玄を誘捕しすこと大勝とす事ありし事と死する事
あつた中よて大勝とす事ありし事と死する事

一 信玄を誘捕しすこと大勝とす事ありし事と死する事
あつた中よて大勝とす事ありし事と死する事

御將二條

用人三條

經國分職

行軍置防二條

驕者

土木

聚斂三條

總論

跋

中興鑑言

平安三宅緝明著

論勢

勢猶水也始乎涓涓而積乎漸涓以至汗漫澎湃一決而去則雖防以千里堤亦不可禦也勢之去王室也久矣原其所由亦將何在邪蓋土地兵甲勢之實也本也禮度名數勢之文也末也二者不可相無之術而其能審輕重以制低昂者必先厚其本積其實豐大盛強有自弭於其中而以此而行無所不可自凡正朔之領爵

位之等、條教法象、冠裳書軌之制、上下遠邇、唯
恐奉行不及、而勢斯張矣、譬之殫梁、吸膏、有以
實其腹、而後風平氣色、外溢而旁達也、不食則
神羸矣、失實則勢去矣、我前神聖王、灼知其故、
也、其仁如天、其明如日、欽畏儉勤、以定所止、以
創天下、於跋涉討伐之餘、嗣皇繩、仰遵、貽謀、
民籍戎政、柄常在上、亘百千祀、莫有敢違越者、
而昇平之久、生為帝王者、坐億兆之上、長宮帷
之中、亢而不降、日就逸樂、為政則比例用材、則
品流倭歌伶樂、以為化俗之具、賽神佞佛、寵僧

崇巫、以為祈永命之資、至夫軍國機樞之務、與
征行暴露之勞、舉而委之賤有司者、置乎不問、
不知天之立君、將以愛斯民、而民之戴我、亦皆
前王遺德所致、乃昂然以謂、天上之人、足不踐
土、固吾職矣、吁、英傑之人、何代無之、不在上、必
在下、滕氏之干政、豎據專迫、已不下、咽、因循之
際、上下日遠、文武日離、海內控弦之士、隱然歸
心於源平二氏、畏其威、懷其恩、甘為之奴、故討時
勅源平二氏調發州郡罷則散還毋得永有統
屬而二家典職日久威令寢布海內武人往
私相奉附如臣僕然不復知有朝廷鳥羽帝
屢下符禁之不得止王室之衰實由此焉而

保元平治間，滔蕩委情，彌甚。終至自隳，三綱以造，骨肉之亂焉。則我常指為武人，卒吏不可共齒。殿陛之上者，如源義朝也。平清盛也。既已假其手以濟其私，則又不得不答其功以填其欲。子弟清要，盈於朝班，食入郡縣，跨於寰內。上皇元相，且遭呵斥，幽廢蓄縮，以止由是時也。雖一旅卒靡得而制其命，兵甲之權移矣。尋源賴朝之起，廟謨所幸，賴其盜而除我寇，延其虎而驅我狼。跌足義仲，褫魄義經，恒悸姑息，方逃其嗜。嚼吞噬之不暇，而關左之地全然。既為其所有，

開府領邑，置吏命將，攻擊四出，唯其所為。蹂中畿，鉏山陽，撞南海，鑿西紫，兵之所加，蓋無不徧。而後恫疑虛喝，劫以威虐，卒出總守護之請，一舉取之。方源義經居京師，將起兵攻兄賴朝，恐四聞之，大怒。既而義經西奔，朝廷懼，與大江廣元為處，命近京諸郡搜捕義經。賴朝因與大江廣元謀專擅，郡國之制遣北條時政，諷言諸國不設兵備，則叛國之如義經者，難時捕誅。宜國置守護，莊園置地頭，以武人為之。自為總守護，職而官私並課，支糧段別，五升朝廷。冀釋其怒，所言皆聽。或云賞賴朝功，以此時也。雖一莊邑莫不為總追捕使，誤也。由此時也。雖一莊邑莫不責其課，土地之權移矣。爾後天子所食，提封有限。如候國，然而職田米地，神封僧業，日就剝蝕。

如蠶食葉朝廷不知雖知不能問或懷寬者亦
往詐鏹倉取其聽斷而上之所出正朔而已矣
爵位而已矣其鳥足以振乾綱而威民志乎哉
後鳥羽帝以兒戲之拳試虎口之呀一敗逐辱
祇足以煽其虐燄而後醍醐帝天資英毅自即
位初思建明中興以雪國耻據王澤未斬之餘
而乘賊運垂亡之會始焉勤勵韜而不戢終焉
難關挫而不撓遂得天人合應而豪俊爭附義
旗所指摧枯振朽以殲元兇勦宿猾而舉天下
之民載其版籍稽顙于廷焉功德之盛未前聞

也雖然土地大利兵甲太威小人之所畏而大
人之所爭也假之久久人心風習皆此向彼難
可復返是以彼則豢養徼功利慣為悍驚以嗤
笑衣冠者其心固快有如易業喪產而深姦
大志竊懷缺望以兒視朝廷者亦鷹窺狼顧將
待以發於其間焉一時為之上者自非固聰明
神武豁如太度驅策牢落大出人意表有以屈
服之則孰能弭未萌之亂而完再造之功也而
如帝恬令所得遺古所喪業就志汰益恣宴安
土木珍異內謁濫賞競興縉紳取樂一朝意欲

日廣國計告匱乃加徵租稅作為錢鈔紛々不自支持雖有一諫臣藩宗而言不納也死不知也廢敵之極處置乖錯以縱夫姦雄於關外之野則黨舊聲類四面齊起真均土崩而瓦解不可收矣卒之車駕南幸將士日以賈墜境土日以削蹙僅擁虛器於窮山幽谷之間力竭勢迫聽劫和而入舊都南朝滅焉而天下永為足利氏之有矣嗚呼事使之至不可為者一由人主不自為之而不可為之至雖欲為之亦不可得也然則後之為之何如曰勢也依而導之耳

論義

興復二條

後鳥羽院惠北條氏強專朝權日替圖徵兵討之土御門院諫止不聽終有西洛之幸及四條帝崩無嗣北條泰時乃立土御門院子邦仁是為後嵯峨帝及獲位更懷滅北條氏以雪國恥以時未可不能有發遂讓於長子久仁是為後深艸帝在位十三年帝性柔多疾而皇弟恒仁生英穎多材力有雄武之資

後嵯峨院意冀藉其體胤有以濟志乃
命代後深州帝是為龜山帝、生子世
仁、後深州院亦先有子熙仁而後嵯峨
院特取世仁養在左右立之為皇太子
臨崩賜手詔北條時宗曰朕固卿家所
援立自今而往繼代之事一依策定別
留密勅于中言朕有所懷其以當主之
裔世承寶祚新院特賜長講堂領百八
十所以給子孫食沐後深州院以位事
故與帝不媿遣告時宗言已嫡嗣也子

孫當得迭立先帝遺意本非專屬當主
時宗密遣人啓問太宮院後嵯峨帝之
山二帝之太宮院答以先帝遺命實屬
生母也今上由是時宗始不信之帝讓位皇太
子是為後宇多帝立十三年時宗更計
設建兩統以制廢立之權請以熙仁為
太子稱謂本院後深州院嫡長無它過失其
裔不宜永廢也或云龜山帝以嫡裔不
宇多帝龜山院及帝大以為憤而熙仁
者誤也遂立是為伏見帝、讓於子胤仁是為

後伏見帝之時伏見院遣言北條貞時曰自龜山帝欲雪承久之恥不肯一日忘懷其裔在位亂其至矣若朕家永與關東圖無事耳貞時曰策定兩宗迭嗣限以十年於是後二條帝宇多花園帝伏見二帝相承以立凡後深州帝之裔稱為持明院而龜山帝之後稱為檀林寺矣初後宇多院生次子尊治龜山院愛其穎悟亦取養之心常祈其獲位及花園帝之立議以後二條帝子邦良

為太子後宇多帝不可而言朕有所慮宜先立尊治次及邦良尊治已立是為後醍醐帝則夙圖興復以繼後鳥羽之憤而畢後嵯峨之志焉竊徵兵士不諧而止及皇太子邦良薨北條高時請立後伏見院子量仁為太子帝乃遣權中納言藤原定房後伏見院遣權大納言藤原俊光于鎌倉對辨其事定房陳言持明院家在位併有長講堂領當帝家去位何所得給長講堂領既付彼則皇

統當歸我然以關東請屢見易置設建
兩宗限以十年並非先帝遺意也高時
不肯奉詔帝怒遂又舉兵而北條氏就
誅滅云

中興之事其可已哉自源氏來時亂創姦計竊
有我祖宗之土地挾威強而肆沮抑使其名為
天子拱手不能有為若贅旒然後烏羽帝不勝
之憤倉卒有舉倍隸之徒則益猖獗抗旌指闕
取而幽之窮海終天不歸當時衣纓橫羅流挾
屠戮之慘者亦不知其幾辱已甚也至後嵯峨

帝常懷有以報聖時非勢乖隱忍終身纔貽其
意於孫子百年之後庶幾有濟而後醍醐帝乃
赫然奮怒糾合四方嬰壁一戰破而不摧遂殄
渠魁夷支黨幾無噍類凡日月所照漸海極陸
莫不奔走歸命則列聖二帝在天之靈於以得
慰矣其豈可已而不為哉賊之再起疆圉失守
則復挹負神器後步南行披艸萊以居擁手掌
之地而敵滔天之寇寧以討滅之為期其氣之
所激及乎三世扶疲支倒紹述不殞能一乘敵
虛復神京而止之已久遠裔遺孽或招舊舉兵

者長慶帝之子稱光帝崩乃奔伊勢與大納言源滿雅舉兵
不克而降終于京師文安中後村上帝子或驚
僧圓胤起兵與畠山氏戰于紀伊敗死
關奪璽者僧金藏主南帝之裔嘉吉三年推木
禁內奪劍璽而去延曆或稱王山中者醍
寺中堂為官兵所攻敗死或稱王山中者醍
四世之孫長自天親王次忠義親王批吉雖山
野至長祿中為赤松氏家士誘而殺之
谷樵蘓之民猶能貢其橡栗以奉庇之夷戮銷
散塵斷灰滅而後已至應仁間蓋有南朝王子
者存焉應仁之亂山名宗全欲奉要之不知天
命所歸應稱為頽而其為志亦可悲也如其帝
之德不終功不成祇以速王室陵替而五十年

間百萬生靈致肝腦塗地者豈足之郵也夫義
其烈哉

世傳帝在吉野手造合子葛根為之或云松根
為之至今以其器行茶者賓主之禮有加云夫
南朝之事微矣當時壤土僻狹四方梗絕供御
且不能給前者紛奢繁華之娛一無所有而後
為雕刻器玩以效尚方細作之事用以過日其
無聊亦可知然至其復讎反正之為念則雖日
夕飲酣之次戲劇歌詠之餘每寓其意懍乎不
忘嘗宴至天明藤原隆資作歌曰玖和年古宇

斗奈玖夜余志能ハ、夜麻加羅須加志羅毛志
呂志於毛志呂能余夜蓋按其音亦能振而不
衰焉其能建偏安之業於至危之際餘燼炎ハ
隨撲隨起延數世以歸乎盡豈不以此歎雖不
能終君子哀其志而予其義

兩統

大一統謂之玉王所有之位得之於天承之於
祖至其推長擇賢一己之由不容它人得擬議
也北條氏遙握朝政斬刈公卿竄數天子於絕
海孤島所為自極虐戾而顧人心之未厭而大

義之難誣也乃深懼巧計建兩統之義以謂期
待代遷之間未得者必藉己力而我每享擁掖
之功彼亦懷扶翊之恩既得者或有已令而我
每憑皇胤分爭之名彼亦受貪位渝約之咎此
可以永持廢立之權弑逆幽斥得有所誅也自
茲厥後宸極之上如逆旅授受之際如更番雖
有所生不得與以其有其入而為子者固有所
迫而尊以為父者亦有所扶父子之親唯勢之
拘而天統屹爾分立矣豈理也哉元弘之時持
明院主果漏朝廷密計冀其遜位北條高時亦

得廢黜公行更有レ所立而至足利氏一遵遺轍
規以迷天下耳自而分首罪之責計可謂狡矣

正統二條

統之歸與不歸朝廷之名分已定矣固非臣子
之所可敢言而後村上帝之時有一侃、中院
公懼王迹衰極民之將迷其所仰嚮乃著神皇
正統記本于肇國至于時主以推神器之有歸
而揭皇緒於將絕論者或謂其顯微扶正幾得
春秋之遺意云恭惟百王之傳嫡、相承子以
授孫兄或及弟神功之擅朝亦有應神之正儲

武烈之絕嗣則得繼體之入立未嘗容餘閏篡
偽汨其次而曠其曆而如平將門之梗命不旋
踵就梟夷平氏之暴源氏之姦取之易如反掌
猶能奉位號效臣節非有所戴則不可豈不以
前王威德之烈與我邦人心之正實有以軼虞
夏商周而足起宋主之歎愧者哉日本宗朝僧
奮然聞其國王一姓傳繼臣下特至延元捨擾
皆世官因歎息曰此古之道也
之際南北瓜分各建正朔使蒼生戴兩日者凡
幾十年正統之論作焉余觀公此書大以歎世
道之降云或謂正統之辨無以多為以神器所

歸卜之耳曰固也而未也若此器也祖考精爽
所憑以護祚而鎮國不與秦隋偽製誇謂承天
受命之比後周有神室有傳國室神室明受之于運並室而不
用上階亦有神室室而不用神人以之不離民物以
用受命室封禪用之之不移上常有崇畏弗墜之心下永無覬覦不
逞之萌而器之所臨亦必在統當續而德足稱
者焉統器之分弗判矣而淳朴之易散人偽之
日閑及姦猾之徒起以謂世享富貴者何人可
取而代之乃俸世之亂政之弊肆其詐力一挈
土地大利而去則我之所有黃袍我冕豈徒

成虛貴器之德於是不能不輕也彼又以謂此
前代遺物耳存與不存庸傷南朝有之介而滅
之北廷無之推而奉之廢立自由顯言尊氏劍
也良基壘也雖或有擁傳國寶臨以制之者忍
然已莫之卹而其勢遂將兵劫威迫奪諸正嫡
之家而與諸庶孽之裔挾以令天下而後止焉
當是時也我又詎以得聲而討之統之歸於是
不得不辨也余故曰正統在義不在器夫周成
康全盛之時誰分德之與器也及政衰楚人來
問乃答之曰在德不在器其亦季世之言耳後

之觀余言者將益歎世道之降云

予已言統器之事矣及退而考其終始蓋儻然
祇感不知汗之決背云夫神器之傳百王親相
授受以至後醍醐帝北條氏幽帝迫傳新主不
與再請乃授以鏡及偽劔璽其真自隨于海上
尋光嚴帝携偽劔璽東奔遺鏡宮中車駕歸闕
三種復全而偽劔璽亦為護良親王奪之駕之
自延曆寺歸足利尊氏又迫取之時鏡劔璽皆
豫偽造出以授之其真又自隨如吉野後村上
帝攻京師悉收偽寶及後龜山帝之講和器終

入洛矣由是觀之其器之所臨實在其統之當
續者而爰及南北混一器歸統正萬世下不
復容姦臣賊子孛頤其間焉神之德昭哉可不
畏哉後花園帝正長三年南朝之裔僧金藏主
以兵入禁中奪劔並璽劔棄之路而至入
吉野至長祿中赤松氏家士
誘殺南朝王子收至土之

論德

修身 二條

久矣帝王之學之廢也而其緒之未至墜地者
洵以前聖遺德洽在人心不可磨焉耳雖然所
謂學者願豈喻諸語言布諸方策而質諸事為

文禮之末為哉蓋天地之化如是行祖考之靈
如是明而神璽併劍鏡亦謂之璽其攸憑人心其攸歸
為之親子孫者惟慎惟直弗怠弗邪以體貽訓
而奉遺器於同床共殿之上代語見神與之語與
之默與之游衍與之出往與之坐內臨廷以統
億姓而理群彙造次且不能容以私焉則我俊
德之所楙昭者永與太陽並懸而所以主乎身
極於民者亦皆協帝之中而率天之常神人祖
孫於焉混合無有間隔宜其祚之窮穹壤而不
移也代語見神此謂天子之學而純古之教其為

淵源豈不穆乎深哉世有所謂神道者流或云
瓊以妙治天下鏡以明照山川劔以斷征不順
按此言本五十一迹手一時所此物稱賀之詞而神皇實錄天口事書神皇系圖援以為皇祖遺勅証謬可已不然作日本紀耶安或云瓊慈不載之神代卷而叔之仲哀紀耶
悲也鏡正直也劔決斷也或云瓊以修身鏡以
正心劔以致知或云配知仁勇或云象日月星
或云則天地人或云以鏡為主或云以瓊為本
或云心有三種或云三種分十種嘗考其說不
勝縟舉而殊不知祖訓之所在劔亦可瓊亦可
一之亦可二之亦可特此三者佩服寶重日常

臨視以照其容其身之所親心之所愛莫如焉
是以手而授之曰猶視吾也代語見神則受而奉
者惕然誠發聲響感通隨身與器之所在而祖
考精神昭左右盈上下不可得而蔽矣是乃器
即人人即天國脉由之而傳皇道由之而生所
以使聖子神孫臣工黎民畏保欽仰不能自墜
而貴賤上下之位禮樂政刑之施遵其叙正其
度不能自紊也厥豈湏喻言論理而為者哉說
者適以其至易至簡無施口舌而為憂依象假
類援釋混儒紛紜支離畢使王教精微之旨鑿

然日失豈不足歎也其他不流為巫祝資糈之
術則雜為浮屠賣妖之媒讀梵典者指上世神
明以為金狄所化講深書者推國系源派以為
斑吳出侮聖之罪為罪何如至近世又取宋儒
性命之說以張皇文飾之陽忌牽合陰事剽竊
誘曰理準四海不期而同則言誠似矣而真益
亂矣帝王之學之廢也固久矣哉後醍醐帝之
所以為學者果而何耶曰倭歌也古之聲何其
希而後之詠何其繁在昔之時秉純實不雜之
德施恭默無為之化內之所存常足外之所發

必節而其值事物之感溢以為聲音響節奏至
可歌者蓋時乃有之亦必樂不淫哀不傷以諧
中和而歸敦厚矣宜其皇化之清而民欲之淡
也世之漸遷趨尚澆淳內焉若搖外焉若熾每
男女之交悲愉之感駢集而互攻不能不藉其
噍殺滌濫之音與綺艷促切之詞以泄吾鬱意
至言隨不知制止而玩為流風每世必有所編
撰以為一代大典廟廊之上傾冕支珽俛焉吟
哦過日凝思而費神於時花流景閨房帷褥之
間抑雖太平餘華有可足觀而誘淫泆資文弱

弊亦多矣宜其欲以經夫婦而益亂而欲以美
風俗而彌靡也帝尤嗜其藝專精刻意寢食不
置所著不下幾十首雖當時專門之流難與爭
巧信其安時之力不勝作歌之巧陳後主工詩
賦詩及出帝目之曰以作詩
之巧何如思安時之事乎而優游玩愒之態
柔情曼容之娛因以潛滋暗長致使妾嬖多言
上下偷安亂階自此終乎不振則是學也與梁
文之創宮樣而陳主之制新聲奚異梁簡文帝
為詩謂之
宮樣陳後主與妃嬪狎容賦
詩采其艷麗者被之新聲曰佛教也為君之
職唯天是事承以布德行政祈以勵精致誠或

遇恠異以被謹告又益恐懼脩省匪懈蓋其乾
、乎終夕之頃而致、乎一息之存務在此日
遑貳其心此古之所以能使穹玄降豫郡靈致
和下免札瘥之患而上歛壽康之福也自君心
之非邪說由興其怠故上下神祇威臨日遠其
暇故求難得之欲旁赴不經而咒詛之於災命
厭離之於死生來來吾虛信而且固嘗讀朝廷
典禮一歲行事半在修法雖乃聖體或至徒跣
練行周歷山林使夫精明之運將以經綸天下
者一由枯槁誕慢唯恐不灰滅蟬蛻而機政之

務將以鎮暴亂塞青咎者亦專委於祈禳厭蠱
之小數矣此後之所以治暗法荒野多金革而
國懷危蹙之憂也帝夙悟禪旨精密法招僧人
以誚鎌倉親修金輪法祈六波羅平而足利氏
之強不知所以勝服延外國僧與之間唱行宮
臨絕乃唱妻子珍寶及王位臨命終時不隨者
以為要義而耽色崇財宮室狗馬且不能屏則
是學也與宮中誦仁王經用唐代宗事而臺城為荷
泣者用梁武帝事奚異以帝之曹聰也使之退省
審其聲以及節情之正慎乃位以盡奉天之誠

絕滄蕩杜邪左澄然有以定其本源則既與同
床共殿之器對越在前無所不肖而祖考所闢
土地人類亦將舉而付躬矣惡不可以振蒙正
之業夷東諸國而並烈于神武哉神武紀曰是
時運屬鴻荒
故蒙以養正
治此西偏欲建帝王之圖而不講帝王之學
惜哉

帝王之學其果絕於今邪曰否余每讀帝顧命
詔未嘗不毛髮竦起凜凜若視其容於前何其
烈也荷列聖之緒業而懷二帝之深讐唯報雪
之不忘始之圖北條氏左右文臣南北僧徒加

以一二武人贊其謀畫後之拒足利氏人心重
搖兵鋒仍挫率衣冠子弟敗亡餘卒以棲南山
蓋其濟與否不可萬而倖一其間圍于貌貅投
乎魑魅衝煙燄踐波濤親以玉體試水火而堪
凍餓及既得復失叛服忽變悼骨肉之罹慘而
愕爪牙之並斃播遷狼狽幽迫窮蹙僅與鳥巢
獸窟相為鄰伍可謂危至而帝特斷然必行固
守不嘗為成敗終始之所移至彌留勵嗣主以
討賊曰是吾志也汝等不遵子匪孝臣匪忠言
訖按劍而崩焉是其一念之明至斃不熄蔽而

愈熙柳而愈躋帝之所以復有大物於一旦之
頃而奉持神器於五十祀之久者豈不在茲邪
擴焉則無所不至也帝王之學豈特行乎古哉

治家三條

天德之純所以王道之不息也帝固有多之
欲雜乎念慮而云々之事吾已卜其不終何也
曰內寵盛而女謁行也夫妖冶之態長古之厲
速其本心蠹荒神鑑昏蔽而讒斯行賢斯隱忠
斯害雖屬奠安階以創亂自古而是況以恢復
為己責將伏薪嘗膽之不及而女德之累先聲

不美逮既濟之後自倒維城亦由淮后之庸愬
也終逸巨寇亦由淮后之援助也乃至百度繆
濫骨鯁避跡而將來離心亦皆莫不昏荒之由
也成而復敗豈待異日而知哉聖人所云終始
惟一者謂其能立於始而不動以要於終而不
變也所云靡不有初鮮克有終者戒其終於始
也至易之乾坤詩之關雎又將以陰陽夫婦為
垂訓之首則可見王業之克終在於慎始而始
之所慎正在於色治亂之機造端微焉
不知而為之謂之愚知而為之謂之迷色之禍

人國尚矣而聰察之主材智之臣每為其耽溺
蕩不復返以至喪身覆邦其不知而為之歟抑
知而為之歟帝亦千載英主已然人之所愛莫
若子而况護良功烈識謀一時無比政之所虞
莫若姦賊而况足利尊氏巨勢詭計一時又無
之比而卒受厥貶執兒付遣任之屠割慘不可
言其處心顛倒以至乎茲豈非有艷妻中夜之
泣由內促之而然哉可謂迷甚矣由是觀之未
有夫婦不正而父子得親者也
邦之所以能治且久要在養其主之幼以正人

而所以至亂且短要在養其主以小人也三
代隆盛莫不由斯治道之係切焉帝所生凡十
有五人或早沒或為僧不顯餘唯七子矣幼皆
擇有德望文學者輔之講古道習倭歌之為務
而有事輒撤綺紈冒霧露以臨邊遠蹈行間未
嘗以從前驕貴軟靡而待之是以首得護良之
建勲義良之紹志而尊良則扞禦方面伏節白
刃宗良懷良則橫身戰陣終始勤瘁恒良成良
則年甫童幼遇醜賊手從容不辭又其溫雅風
流皆可觀采則帝蓋亦識斯道者矣余曰謂世

多以足利義詮為庸劣之輩不知其深慮遠識
實以興二百年霸基也將死擢細川賴之於諸
將中委以天下指謂子義滿曰汝事之如父義
滿自臨政克奉遺教而賴之亦能盡心輔導多
引老成博練之人布在左右俾其朝夕聞見每
取師範識日開而志日定以致戡亂立威併吞
南北如源賴朝驕養其子一再轉而亡豈足與
儔哉有邦者勿忽諸或謂足利基氏薦
賴之于義詮用之

勤政

帝自踐阼親御記錄所聽訟而通寃出糶而救

飢除關稅而利行旅其始初清明善政累可
記以改民觀萃人心而兆中興之謀也廣矣惜
其不終也嘗考源氏設計以天下之權未易一
朝而奪也請以其人為諸州守護俾我土地兵
甲之威日張而彼號令制度之施日縮蓋圖漸
以吞之耳未始顯然定制使朝廷無所參預專
斷也不然當二帝西狩朝綱壞弛之季時君親
臨民事錢穀租稅斷之宸衷而播之時政此正
北條氏之所大忌豈可以傍觀熟視不得沮抑
而止邪蓋當時有志之君猶得可為而前者數

主認、然唯恐逢彼怒攝處偷過以安逸樂而已然則王室之不振皆由不自為之渡孰乎咎

風俗二條

所以多張禮樂教化之術而廣設刑政法令之具期以平天下者要正人心敦風俗如是而已也故明主之於治每常超然遠覽顧天下之風俗何如其弱也吾將何以振之其偷也吾將何以警之而有所刑也則曰足以懲世之為惡有所賞也則曰足以勸世之為善創一法發一令未嘗不視諸廣遠悠久而後行而其所行之實

則躬恭勤蹈節儉施輯睦而推仁慈于上勵廉耻張紀綱誥倫理而申忠厚于下其所施之序則誘而導之防而遏之鼓而奮之漸而摩之雖節目之或踈也歲月之或淹也率使朝近限遠日遷不知舉而在吾陶鈞矩矱之中焉是以安與天下之人心共安固與天下之風俗共固傳至子孫結而不解雖不幸有亂起随就平夷國固自若也此謂治之至而次者往々好名傲察任吏治拘文未其迹如可觀功如可喜而率天下之民柔靡刻薄日喪淳心以速國脉之促也

不如不為之愈也。又其次者，恣意無執，不曰循則擾動，法且蕩然，無所持據，遂使天下之民，淫縱爭奪，窮怨交起，而方時禍發，一敗不收。此又不足以為論也。中古之風，嘗熾矣，遵守之久，漸赴陵弛，以喪邦國之有。至帝奮用兵革，有還復之，而不嘗就今日之所得，以繹往日之所失。上下酣樂，無復法揆。當時有為，匿名書，以詆時風者，指斥歷々，可見而值尊氏之一呼，辛苦經營之業，不旋踵而墜矣。中興之主，猶且同轍共覆之，不知慮則後之治天下，誠能論及人心風俗之本者，宜乎鮮也。

帝之時，天命一革，其承而革之，將於法歟，於風歟。夫法者，所以持風之具，而風者，所以出法之源。古之聖人，能察其時勢，人心之所移，因其趨而矯其偏，立之中制，有以定一世之歸。於上則自凡紀綱，所維令號，所施以至賞刑黜陟，文章器度，亦皆有所考以創之，而有所遵以守之。至久不弊也。故歸定則法隨矣，未有徒革於法而能還天下之歸者也。帝素有高世主之心，自復大業，多所變更，其言曰：今日舊例，乃往日新制。

安知朕之新制不復為後日之舊例蓋或用式
令之典或剗源氏之政或復古或沿今紛々並
舉而至夫君主所養臣工所玩奢佚靡弱昏以
淪陷者則不啻曰仍方且扇熾蔑講所以振刷
更張定為大歸之道焉法未布而邦先潰豈不
宜哉雖然欲正其風者必先正其身是以難也

號令

不知則不信不信則不服此天下之常情也天
子乃深居九重之邃眇臨四海之廣居勢懸絕
不可以人喻戶說則特其言之得達下而下之

仰以守之者賴有號令爾其謀之于始也誠哉
審慮率天理副民志無所不用其至順要之于
終也不以好惡之私而中交不以貴賤之勢而
乍輟懸一世而亘百年亦無所不用其至確則
君上之意洞如日月徵如四時自遠自近入耳
入心廣溥均浹孰不覩而知之而又孰不知而
信之聖人之能服人所執在斯焉方帝之維新
海內之民起而想其德音矣若乃源氏以來守
護家人來萃闕廷者如失林之鳥虛聲且驚思
以偵政之向背而措身之去就雖一文書行下

傾耳潛聽而號令之發朝定暮改彼奪此予內
批廷斷每為矛盾論功主吏依違沮閣往往以
數人爭一賞邑所在為之擾動是將俾綸綍之
言反覆泛濫不知適從而究其所由一不過出
愛暱蔽冒之私彼亦何苦坐受屈抑容不待英
雄創手以蹶起也哉當時已有妄綸旨之譏有
匿名書歷詆時政者首曰妄綸旨而赤松圍心拒王師亦以此
為詒帝之心表於天下何如邪

賞罰

徒賞雖厚天下將有不厭者徒罰雖嚴天下將

有不懼者必有要焉公而已矣夫人孰無欲力
出于一鄉者志奪一鄉之食智出于一國者志
規一國之有縱其意望不知所節則雖授以天
子之貴四海之富而不足也是知天下皆私矣
而彼能首出庶物以持宰群品者以其至正無
偏之心而行乎至中不僭之道其未發之頃衡
懸鑑空不可得而窺其際而已發之後電擊風
靡又不可得而問其當與否及隨而跡其所施
也則勤必勸之惰必警之慝必懲之淑必獎之
其所以折服鼓動皆已指要窺而中節奏矣雖

乃大暴亂，徒焉得不首洗滌矜奮從我所麾以
奔之哉。帝自恢復，縱以田土散給內御諸司，若
浮屠優伶之徒，其所私已可見。而至夫姦若足
利尊氏者，則一切姑息，割土假器，冀安其意，不
復遑問其心之忠邪與功之殿最，其亦賞之徒
者耳。無厭之欲，豈能飽而不起邪。

御將二條

有順而為者，如始于春而終于冬也。有逆而為
者，如斂于陰發于陽也。故論教者常以德為本，
而至其制下亦必以威為務。威不立，恩焉行。當

無事日，上之所自持，苟非明睿剛斷，有以立其
威，則固不可使天下之民安分。懷惠以銷惡，于
未萌而況分爭控攘之際，狙詐競立，各欲為之，
而我盡驅集併包不咎往不迎來，規以叔效於
一時，方是時苟非擇彼意狀難測，勢力最强者，
取就拉折以伐偏彊，非望之意則又安得使其
來就羈攝，不忍叛去哉。源賴朝嘗用是術於平
廣常矣。源賴朝初起關東將士應者尚少，上恣
介平廣常率兵一萬歸之，竊圖伺其形
勢以決向背。至則賴朝責其來晚，列在陣後，廣
常大畏曰：吾以大兵新至，謂其喜迎，不暇而遭
怒也。終是真大願帝之所擇而施之，正在足利尊

氏尊氏之觀望已久自計我就朝廷則朝廷重
我依關東則關東重持是歸順不得不喜迎而
寵待事因可濟矣帝於是若能覺然出其意表
下詔曰汝降嘉矣然來何遲也前日兵圍震驚
行在罪六莫大其速建顯功以圖補效則片言
之嚴痛於針刺頂門彼且色沮神愕妥尾顛口
以仰我饋而偶得一顏色之顧受一爵祿之賜
亦將欣荷感戴不置焉大者如此小者何足為
慮然我勇之與智非有大勝人者則天下之茲
固不可得而挫折而帝志專在速成偷安見其

望隆黨廣者一時倒戈而至驟然喜躍信寵交
加寧我降而就彼而不能使彼來而求我處分
所有足可窺測為尊氏者復何所憚而不為矣
易云童牛之楛殞豕之牙此道也豈霸者之獨
用而聖人之不由要願其心若何耳

帝賜宮女於新田義貞鹽冶高貞其後高貞叛
附足利氏矣古興業之主皆躬殫勁敵於長槍
大劍之下矣而方其肇造及側之徒猶為旅拒
者素在吾計所策與之執銳被堅馳騁暴露不
即艾夷未肯休息此其餘勇之優已有使人欲

叛不能即叛不可得而逃者然後渥之恩崇之
禮申之以土地爵秩而啗之以子女玉帛一時
之遇又有大出所望者則雖驍悍凶勃之徒形
沮機移勢挫而氣泄馴然已隨呼至矣帝亦似
知是道也然原其意徒惡干戈之倥偬而恐彪
武之難制計飾美姝以副至意冀得內外款密
而已夫色豈天下所少雖失乎此可得於彼彼
其殘饕猾黠功利之狗者固無為一娥眉戀
不去之理而况其去亦未嘗失所愛也高負叛
所賜官誠使所施無不如謀而其詭回屈弱可
女為妻

鄙之甚王者馭物之大體而謂可然哉

用人三條

帝之初思有為也故能處心橫慮久察而潛試
一視而深任以求可與共之人往、靡失其明
尊良宗良護良等之於子弟藤原師賢藤原資
朝藤原俊基源親房顯家等之於文臣新田義
貞楠正成那和長年結城宗廣等之於武臣良
忠聖尋宗信等之於僧徒智能謀力能戰信能
守誠惻奮慨共濟艱難死而不厭者彙出而聯
聘爭為之用是其所以克勦數十百年不拔之

寇而獲沒先王，大業也。其明誠可謂邁前古矣。而遠巡之際，矜怠自恣，暱佞諛納，諛諂諂諂，向之所以為賢可任者，外其人，拒其言，翻然如水火不相容。上下蔽塞，亂從而至，與昏庸主同歸。以終常以一人終始之相懸也。若此，則用人之術，豈可徒恃其明而為也？蓋思則悚，則明。病之能殪人者，謂之痞。禍之能滅邦者，謂之蔽。人唯知寒暑疼痛之為崇矣，是猶可復也。而至痞之漸深，以成痼，則擊扁無所用其力。人唯知盜賊強僭之為害矣，是猶可克也。而至蔽之漸

深，以成風，則伊周無所用其制。夫蔽也者，必有物而然也。雖中庸主，孰不欲治且安？唯其利之所萃，必有圖。篡貪寵之人，不招而至內也。探其所好，投而中之，誘熾攪擾，蕩心眩視。又其藉宮闈，結左右，有昏夜之獻，以貨聲譽，則善唯日騰焉。遑覆實外也。假威揚恩，據位持法，以符天下之口。又其羽翼耳目，中外布滿，察其異已，輒圖搆害，則惡唯日稔焉。由敗露而群小相承，交結河狗，噤默以為守已。隱諱以為效誠，應和贊歎于前，腹誹目笑于後。其或反眦正言者，相與嗤

誹沮，亦不得相容。於是乎隔戶之言，阻如胡越，斷然不相聞矣。毀譽亂而忠邪混，不知也。府庫竭而閭里窮，不知也。災眚起，盜賊起，亂起，陞聞而不知也。且其情塞，怨咽，禍結，毒釀，豈得不一旦決裂，以至疽發癰潰，而至是驚悟，脛臍乎已而切齒乎人，亦何及矣。不加之，辨明早屏其人於四裔，而可哉。帝聽尊氏之間，囚護良，護良上書乞伸理，朝士畏旨，莫敢以聞。後以附尊氏弟直義東去，不知其被戕殺，以逮於亂，殺之患一至此哉。雖然，物之殺我，未嘗不由自蔽也。苟使

帝無惑，准后之色，則我之明固足以燭彼姦，彼之智何亦得窺我計。為人主者，所戒果將焉在也。如彼足利尊氏，術行志成，固可謂得計，而其他今古之間，希寵持祿，喜佞機構，為殺上者，往往罹主一悟，危不可保，而幸而暫免，益以速邦家顛覆，首亂之咎，逃匿無地，及及已交頸，而不知其亦自蔽之甚也。此又為人臣者，所當深為戒也。若夫士遇壅蔽之時，亦可哀哉，亦可哀哉。所以療病者藥石也，所以匡惡者諫諍也。人誰無病，藥則復故，人誰無過，諫則可改。此理之所

最易知而多欲之累與好勝之私相擊不勝以至自欺而拂人此又人情之所最難免是以治朝之設官賓延道德禮敬大臣左多聞右廉節虞朝夕舉措講觀維持以抑盈溢之氣不失畏勵之志而又擇其方嚴直亮者立為司過接以和顏情恕誘以屈懷諦問使之微諷廣陳力爭必得而後已亦冀其繩一旦之愆不終迷沉而傾亡也是時也雖輿人之誦猶在所采况居其職進其道者悉從聽納施行無乎所吝則自凡艷之蠹心儉諛之蔽聰由以剷除開撤令正而事

熙主心通而下情達歡欣流布治無不洽如是夫言之有補於人主而益於天下也願非其養士氣之有素也則實難得使其下出身以言而偶而得之人主或勃色飾罪廢之至于死柳其以主嚴之不立邪上之於下拉而斃之易如割俎肉而彼其可否獻替將以正道何所施我威也以為誹謗之不可赦邪下之於上誰喜揚惡以羅怒而彼其瀝誠抽懔將以誘善何所用我怒也帝亦有一藤原藤房所諫皆中當世要務一切不聽以縱其去可謂愚而悞矣余又謂

積威之下，可以死人。故順意者，勢有所易。雖中人以下，可以得冒鋒鏑，而蹈湯火。至其逆旨者，則方禍亂未見，君臣娛樂之秋。正笏而進，觸諱犯顏，以極言人所不言，其為勢難於死。自非有先見之明，發以忠慨，孰能與焉？且夫死者，將奮力於已亂，以敵一夫。諫者，將杜禍於未萌，以奠舉國百年之治。其功較亦何如哉！藤房其忠矣。

經國分職

自源氏之干政也，法度紛亂，載籍亦缺。豈以武人質畧，恃其功力，朝士逐末，尚其儀文，並遺治

革大體之所係，歟！抑其疽食浸淫，無明制，故不顯言歟。建武之治，莫得而徵。所見者，大畧已蓋京官之制，遵依前代。特廢關白，武人改從直隸。番衛京師，其領郡食邑一仍源氏舊足。利新田、楠那和諸將領二州。若三州，身掌禁衛，永任闕下。置與州評定衆，關東、相番習知其方土之事。者充之。武者所以新田氏之族為頭人。新決所公卿為頭人，以總諸道事務。而記祿所則大史外記判事及楠正成、那和、長年等參直。大事於此。詔議取決。天子親臨焉。又有窪所，以武人參直。天子親臨，不詳何。

為而錄倉遣親王鎮之輔以足利氏陸奧遣親
設也王鎮之輔以文臣北畠氏武人結城氏嘗讀帝
送源顯家詔蓋亦有意併一文武以故州郡之
制或用國司文臣為之或用守護武人為之或
國司守護並置國司固兼兵備而守護亦釐吏
務又其遇文臣固厚而於武人有中興大勲績
者雖其子弟族黨頒爵割土恩亦有加矣然以
其始之賞賜大濫駕馭乖方終之徇私偏納請
謁也是以文臣且聚議思返古時武人多被寵
遇賞賜濫冒及
論定軍功邑土不恰或奪公卿舊封以充之播
紳相怨言曰天下不復公家更歸武家按或謂

帝專厚文臣而各賞武人者誤也而武人已缺望無厭欲起而
用源氏之制為其它觀望窮降之徒叨獲需及
赴義從軍攻城斬級之輩默遺叙錄而除勤王
外悉停家人之號失職縮跡降均編伍雖嘗下
詔云自非賊黨許因家世襲封食然而有司奉
行不明往々隨被削奪而眾怨交起巨雄崛起
國以逮亂

行軍置防二條

將當四方未亂無間可伺之時欲以首事起兵
者必當入死地而後能尋生路取故帝之謀北

條氏招僧兵集烏合以懸守窮山濟則幸矣不
濟任其幽囚流徙而我忠義諸軍所在互出以
擾中原使彼多事奔命兵疲民苦自搖根本則
內訌反噬之禍不得不發因而可圖也果得新
田足利之歸附則鎌倉六波羅一月而平矣法
曰死者生之根審主客而量勞佚廣援翼而明
期會然後兵可以越境尊氏之東還也其地則
舊窟其人則親黨其猶魚放湖而虎縱野乃令
新田義貞將四方懷貳之卒副以京兵東山兩
軍約茶應失緣道郡縣並無以為後拒退步之

虞而孤軍深入決勝一戰敗必矣法曰知戰之
地知戰之日則可千里而會戰兵形倚伏能乘
之者常勝而乘於進也易乘於退也難當賊之
聲捷西上震撞燥烈姦集山壓坐據京城而仰
攻艮岳勢方銳矣而帝乃命駕烏起棲保山椒
終使將士奮勵戮力合謀以成掃勦此何其得
於難也賊之窘敗東歸且不能行戰累敗飄揚
容土勢已折矣而官兵十萬唱凱輒還不肯馳
偏師蹙之海上及其再來莫浚奈何此何其失
於易也法曰避其銳氣擊其惰歸又曰天與不

取還受其咎。捍于水者，殺其衝，拒于敵者，扼其
喉，足利尊氏乘再燃之勢，水陸兩道散漫而進，
而拒者，戢合殘敗，露次以守，港津之茫，藉使善
禦水軍於前，而陸軍臨背，固非楠正成孤兵之
所能策應。及敵前鋒將就岸，拔軍赴之，步者如
走，舟者如追，而接戰已酣，顧視所陳之處，則聞
乎無人，縱其大軍徐上矣。是其地形之失要害，
不待知者，而後知，而朝議以謂王師有天助，宜
拒之外境，遽發援兵，數不滿千，區區奮臂相當，
其猶十夫行堤，以遏江河之決，不沒何待。且夫

兵者，豈恃天命而為哉？法曰：無附於水而迎客，
又曰：後處戰地而趨戰者，勞守城之道。二急攻
則利，嚴禦以却之，持久則利，招援以解之，尊氏
頓大軍于京中，分遣將校，迭侵行在其計，將緩
戰，遠圍，漸以迫之，而初也，幸藉輿兵入援，以得
士氣百倍，故勝終也。不用正成夾攻之策，以致
糧路梗斷，故敗。法曰：四鄰之援，避之勿疑。又曰：
令遠邑別軍，疾擊其後，帝之兵一勝而三敗，勝
者在居，困之初，敗者在得志之日，豈不以國之
大事，不慎，輒失而法所云：戰勝而將驕者，敗者

果信矣

自王迹之西創也。歷代遷建，不知其幾。至桓武帝相攸，山城以奠神器，寶台冲和之氣，而極民物之郁。山河之捧環，在當時亦稱天險矣。盛哉桓武，遷都詔曰：今此山背山河襟帶，自然作城，因斯形勝，可制軍號，宜改山背國為山城國。子來之民，謳歌之輦，異口同聲，時運日替，而地曰平安，京師今宜從之。續日本記。氣東開，往昔所云荒裔之服者，今日正為用武之郊。其地臨天下之背，居高制卑，襟東洋，控北奧，逸嶺一帶，限畫于前，而平原千里，斥落于內。其俗尚武，斷懷桀黠，果殺輕死，喜騎射，它無能

驍姿大畧，間生古稱舉天下之力，不能當武相二州。是以源氏首開府于鎌倉，而北條氏仍之。雖足利氏每懷左顧之憂，分子弟以管八州，欲西面以爭中原者，未嘗不據以為根本也。乃於今之時，眷夫王京遠之舟陸通使，四當戰衝，近之層巘內迫，可以資寇，而一水前縈，殆可騎渡。且其所宅，雖中不足以扼關，左而人亦已弱矣。佃多則土瘠，坐久則席敝，使帝苟有深謀宏圖，足以回世，則其計一舉東遷，以處上游，跨形勝，坐鎮豪傑，以鞏金湯於億載，亦豈可知也。邪如

其不能也。宜停牆宇之工，而給湟埤之備。節簪纓之食，而峙糧餉之儲。山如山，門如門，水如水，守治勢多，衝援地方，運輸衢路，並起也。衛控制，聯絡以屏，帝居則中夜有警，堅卧不動焉。至一再縱敵，平進如踐無人之境，而倉皇奔越，救絕資殫，自取困蹶哉。修大內而不論守，其亦仍舊貫而已。

驕奢

天下之本在身，身之主在心，而唯驕能害其心，唯奢能敗其身。因依疑結，終以至併天下而喪

之。是世主所宜懸以為鑑，而前者蹶後者踵累。接跡於青史之上，何其禍之難拔也。夫二者無所不至，余嘗觀建武之政，舉其一端論之，曰：為人之上者，生以天下之富貴，自享自襁，襁齒齟輔，以保姆勝御濟，其怡喜縱其叱詈，莫或挫折，違忤及其既長，知己所指命，可以生殺人。甲也。則臣庶外內，孰不畏威而希惠者，順從趨走，候顏刺骨，爭奉其欲，使其目之所見，常袒側肩，諂笑而耳之所聞，每狎謝恩，上壽凶敗，死亡語且。有禁舉而有中焉，則贊以堯舜莫及，不中焉則

枉為之辭謂為時宜誘獎是務玩樂日新此將
渡以向嬰兒者遇之而流風相承以為君臣之
儀當然也以是而養焉得不驕即使目有所省
願謂謙抑已甚而允倨侈慢之著心者將有以
倍乎他人焉則禍之成根也固久矣帝得天馬
則有藤原公賢盛陳故事以讚時瑞而後以其
馬充急驛敗兵于尾張發援師則有藤原清
忠誇張主威歸之天祐而殺將儼軍危覆促至
其上喜侈大下尚逢合相得且夕之間以至併
天下而喪之不知也者吾不責之於其君與其

臣而將詰其素養之不訓與世習之不正焉

土木

人主之欲固多端然為之也有漸自小及大自
近及遠聲色之娛已備而營繕之巧必興焉嘗
以人家事觀之屋居之為物支上漏防下濕并
容而兼覆務慮寬深堅牢傳之子孫不傾且敗
及舉而為之必罄產之半而後可成則其價之
重而費之廣宜莫過焉帝王之家外有九門重
城之固內有椒房掖庭之設朝宇寢燕以至廟
社臺省百司所湊雖其常制不鉅無者猶且每

興一後充以一州賦幾乎不足則其價之重而
費之廣亦宜莫過焉為人主者不察會要
不量出入驟然一有以起心則必以舊址
為窄輒就恢作正殿可陋別創構築極
意逞巧盈花石而飾金珠其為費將不
貲而加之嚴督急期照燭夜作費故倍
焉夫昏黃緣乘時侵盜費故又倍焉終
至以傾府庫竭貢賦而民亦窮矣奢之
厲民而速者莫此為甚豈可以忽而不
省哉秦以天下之力作阿房未成盜賊
起為焚炬所焦而帝甫歸闕命廣大內
成輒為賊火所燼昔人已

為秦憐之而我亦將為帝悲之焉

聚歛三條

窮而後作法者雖巧益弊亦盡反其本矣夫欲
猶漏卮也不塞之釁終日沃不見盈今者以人
主之求求每易給而煽以小人彼罷此起雖資
以奕世之業連府之財不得不至置且盡有司
者乃覺額握籌百方取以奉副而財利之議始
起焉誠其所計有補乎國而不傷於民也而利
之深入甚乎油膩其實一開上下變指教主見
其可智取無心乎父改而萌欲於封殖害一矣

教臣伺其旨向以圖恩獎格尅之令將疊起
害一矣教貪吏黠民緣為隱漏欺罔事皆賄成
取償於官有積于此實闕于彼勾竅靡爽而消
耗亦多害一矣遂教民心操競逐末任偽竊相
傾奪利權下移物價不平以致天下之財不知
其滯聚之處與泄失之端又其儗成俗無以為
恠則雖峻法嚴刑莫知所施而仁君賢輔扼腕
欲釐革之亦將有不勝焉者害豈可勝舉哉矧
夫財也者不自天降不自地生萬無有不取於
下而能足於上之理則所謂巧也者雖乃神筭

而鬼計亦必不出張設名目以欺劫之或漁山
澤之細利謂之為收遺或爭市井之畸贏謂之
為抑末或縮庶司之經用而減百官之食俸謂
之為節用及責之民則立說謂薄取諸一人而
厚收諸四海是可以使下無甚傷而上有洪補
也夫浚民之膏猶刺人之血刺一指血見其無
傷遂以連臂及肩無所不刺則必將大損其軀
以至喪命彼深指于民利者見一施行後天下
未即困斃以為計之中每有不足仍發故智自
田之租戶之賦權于酒改于幣以至鹽場鐵冶

茶絹舟車關津店鋪間架荷擔追債而豫徵倍
舊而創新又從率貸而助獻將見其根枯全剝
慘及膚露甚乎頭會箕歛焉則其害之極豈不
至覆亡而後止哉古巧取民稱桀弘羊然終以
致戶口衰耗而盜賊滿山非輪臺之詔下恭主
嗣立則漢之事且不可知而帝亦巧其術收守
護地租二十分一尋行鈔又尋鑄錢鈔之作俑
此也其法之行甫一聞歲而兵興國破南遷不
歸想當時民間囊箱盈貯印楮挹以悲歎者幾
何矣以倭漢之事觀之所謂巧而益弊者其言

皆可以驗而世之談經濟者每以殖財為務雖
學士大夫亦云可謂暗哉

情原乎下而制由於上則政可以行欲縱乎上
而禁加於下則其政不可得而行雖行不可保
久而民擾事沮徒招愁怨以止其於錢貨楮幣
之事最昭、可見焉蓋穀粟布帛天下之實寶
凡有口體者之所必需而弗可闕而五金之為
物飢不可以飽寒不可以禦特以其精氣所萃
生稀而品尊故天下之心固已貴而珍之矣當
古之時倍朴而事簡日中成市抱粟負布民之

生亦自給及至中世智與文開巧與偽生治則繁其飾而亂則周其備苟非有移遠輸多發滯通壅之術以濟其不足則家國之務將廢而強暴之寇弗防飲食器什之微亦將失其所資聖哲之君有憂之取夫天地之所稀生天下之所常珍者為之制而權其用至其黃白子母等而差之亦皆據物性自然之所存依人心自然之所赴有以示轉輕致重之為利則蚩之民靡然後之事立而生遂矣此三幣九府之所以通四海施萬世不可得而廢而後世以楮易錢其

道亦與是同楮之為物固不足以充啖食被服而其品之賤又非可與五金比然自唐以來有飛券有監鈔有茶引齋擎轉行實便於錢而天下耳目自知夫方尺之楮可以動萬金之貨亦既久矣至如益州則民苦鐵錢之重私為交子以行市里於是乎官因其情以建其制寄重錢于上而通輕券于下一府千里之民長以為賴而南宋北金經元迄明其法施及海內與錢貨並行無所復礙錢實數而楮虛名也以故楮法茲弊易生上下相欺非四海萬世所亦物性人情之自然爾故以物為本而錢權

之以錢為本而楮濟之古之政其豈不揆民情
不酌時勢而妄行其私者哉若漢武之為政窮
奢極侈至不足而後創皮幣其他歷代或鑄小
以多見數劉宋鷺眼錢類是也或造大以售虛
聲歷代大錢如子母相權之名以歛一時之利
及夫楮幣之為弊則折閱不換廢棄無用
抑配糴價侵用本錢宋之時既蹈而行之元季
終至以楮為母以錢為子之議起此皆苟且欺
罔搏利目前而群下重困物價騰湧併國用以
大窘矣可哀哉帝之時天下孰知楮之可以易

錢者乃以供御缺乏莫計可支故驟然取遠外
之法施諸一世以謂上之所命雖凡礫可寶用
也原其意之所由而推其害之所究當時雖使
南幸之駕未從乎歲月而其歛利於上加虐於
下以至忤物情聚眾怨官民並沮而不可行焉
者必當與前世同乎敗轍而況其傾覆蕩播之
禍最烈且速者哉嗚呼後之行錢其能原於民
情邪否乎

財之耗也始乎濫主之縱欲而終於汚吏姦民
之冒利予前已悲而道之而天下更有泄失之

永惠入、不知其所始、與其所終、建武之時、僧
兼好云、者嘗論而警之矣、何其識之卓、而見之
遠也、其言曰、唐貨自非藥物、皆屬無用、古亦有
言不寶遠物、勿貴難得貨、夫我邦五金之旺、實
盛乎萬國、發為義氣、內肅外剛、懷庶知耻、決于
取捨、而明于死生、雖自以華夏文明、而處者不
能之若、故金者斯民所稟之秀、而我土所萃之
精也、精之所萃、必待千年而後成、其生也稀、其
用也貴、固非如艸木沙石之蕃、且猥而乃歲、
發掘在、桃採以丘委于海、次而番輸于船底、

大洋茫茫、一去不返、蓋其所出之數、十年千則
十年萬、以至百年則萬、而萬引之數、世算成不
貲、勢卒不能不至乎盡、猶之好侈者、月入十金、
而日費一金也、溺色者、竭膏枯髓、待斃于歲月、
而不自知也、及其問所以為計也、則果能、用宋
人茶馬相易之利、邪蠻奴轉易之所得、邪漢和
明款、通關互市、出不得已之謀、以中其欲、而緩
其寇邪、彼此泛然、一無所當、而又問其所易、以
得者、則文綺細縠、染絲毳布、以至寶貝珠翠、髻
硃鈿碾、奇香珍木、不可得而衣食之物、沓臻駢

致殆徧海宇而有之不見何所益無之亦不知
何所損要皆不過耳駭目眩貪遠異以狗觀美
焉耳唯其數百年來相承相效上下貴賤用是
成好亦遂用是成禮商賈奴婢之輩莫不腰珊
瑚而戴玳瑁近開一富商篋中而莫之佩別索外國無
名寶玉以為腰具者必為儕輩所鄙笑不可用也
尚異極侈亦甚矣哉雖乃儉士達人之厭浮費
薄祿賤吏之苦高價者寧且舉貸典賒負債逃
逋而必收買以務誇鬪實亦迫勢之所然嗚呼
民之惑亦尚矣雖然觀之美亦人情之所不能

無而先王之所因以修禮也苟有豪傑之主超
視遠圖欲以移一世之觀者出於其間斷然不
卹小害不顧小利麾夫珍異無用之物於萬里
而去之然後因我所固有而致其飾就彼所嘗
輸而立其制為之章程等差以施王朝候國而
及士庶鄉閭之間倡以踐履之加示以得失之
實施以緩急之序又有嚴令明刑以從之則歲
月之後靡風頹習漸就革戢自凡衣服之章燕
饗之具皆內足不外求而蜀錦齊紈戎蜀蠻琛
繼而日臻無所復用天下之觀斯以移矣觀移

則尚殊尚殊則倍成倍成則化久是其為道不止
革幣于一時而遂將盡我邦之至寶於千萬
斯年而靡失焉若夫藥料水土之不可課種而
醫治之需不可得闕者我土所宜宜及冊籍儀
圖可博考參取以資我實用而知彼情偽之類
則宜質以諸雜貨可歲生可力作之物而及其
不給也乃棄黃白以副之是亦理勢之所不容
已而矧金之歲出於海外者若是之寡則鑛之
日息於地中者自當相償思多寡相濟天地之
常理苟能節而出之則土之所生豈不足移易

以供民用哉苟不能然精寶之生有限豈復
得以質無用之玩而無盡哉予惡無好之為人
矣然是言之有裨乎裔世實足可嘉而其生適
在後醍醐帝之時故併而論之

總論

帝之怠於德也多矣志滿而欲縱亂于本而忒
于儀其何以正朝廷與百姓而法紀質亂總攬
失當佞人用諫臣微復何以綜郡國而操機密
由是祖業再墜不可振復使許多忠義之士無
辜之民委鋒鏑填溝壑禍繇ト不熄焉可不慎

乎、歷叙其德、以利而終、孟軻氏之所戒、吾其無
感哉、吾其無感哉、

跋中興鑒言

勢知不可而義有不可已者、任義則事償矣、義
知不可而勢有不可止者、徇勢則道缺矣、當二
者相雜之際、雖固權輕重、審終始、積慮彈智、以
發難得中、其機完其功、而其能使勢默遷于暗
々之中、義順行于昭々之上、若春陽融物、疾風
被草、舉天下事、莫施而不如、意者則特在德焉
君子其可不豫以養之哉、仰惟列聖承化、政與
俗簡、時稱無為、自中世多故、治亂相踵、逮至後
醍、翻帝圖、濟恢興成、而復顛、則其處厝之方、馭

攬之術與夫閨閫之邃貨利之細熾惡得失昏
然並集陳而論之大有以為世戒者今乃敷暢
條次總之三節以造斯編冀以倣漢廷之援秦
暴而唐人之述隋者也嗟以予言之拙而議之
陋也苟有願治之君以自照則雖過千歲其明
亦將有不蔽者歟

侄正誼校

文政十三年庚寅正月二日起筆以時習館
御本同十三日寫畢之
中村直衛藏

薰蕕錄卷之拾五終

薰蕕錄卷之三終

